

苦小牧通信

カラスの話

牧師 水草修治

カラスよけ

昨春から、「良い知らせ」の通信を持って、苦小牧の道という道を歩きつくそうと励んでいます。先日、歩いていると、後ろからバサバサバサツと羽音がするので、首をすくめると、後頭部をかすめて黒い影が飛び去って行きました。カラスです。

この季節、何気なく木を見上げて、たまたまそこにカラスの巣があったりすれば、てきめんです。今は、カラスの子育ての季節ですから、親たちは気が立っています。カラスは夫婦で子育てをするそうで、巣立ちを急ぎすぎたカラス

の子がウロウロしている時に人が通りかかったりすると、親たちは猛然と攻撃してきます。しかも、カラスはとても賢くて人の顔を識別しますから、いったん「要注意人物」と見なされてしまうと、巣を見上げなくても攻撃をしかけてくるから面倒です。

近所のごみ収集箱が金網製に交換される前、カラスたちがビニール網の間からくちばしを突っ込んで、生ごみを引っ張り出しては散らかしていました。そこを妻が掃除をしていたら、カラスに目を付けられてしまいました。カラスの立場からすれば、ゴミ捨て場はレストランですからね。

それにしても、カラスが怖くて散歩が妨げられるのはしやくなので、「カラス撃退」をキーワードにしてネット検索してみたら、「SARABAカラスくん」というステッカーが売られていました。黒い楕円形

* 苦小牧福音教会ホームページができました。

* 「水草牧師のメモ帳」もどうぞ。

<http://d.hatena.ne.jp/koumichristchurch/>

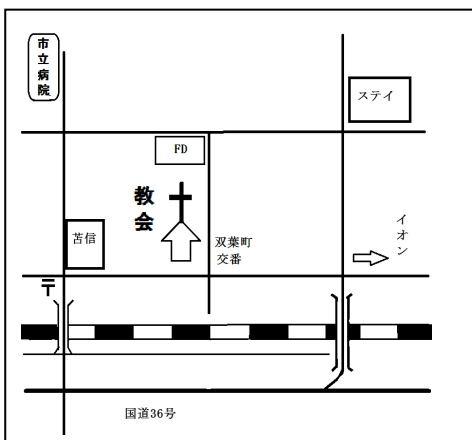
日本同盟基督教団 苦小牧福音教会

牧師 水草修治

〒053・0045 双葉町2丁目2番一

電話 0144・32・3671

双葉町の教会へどうぞ



日曜礼拝には、クリスチャンでな

くても参加できます。

日曜日 第一礼拝 午前九時から

第二礼拝 午前十一時から

* 礼拝のYouTube配信「苦小牧福音教会礼拝2022年*月日」で検索

の台紙をバックに、黄色の目玉が二つ大きく描かれたステッカーです。白目部分が黄色です。これを付けておけばカラスが寄ってこないというのです。値段が880円。

そこで自作することになりました。家にたまに真つ黄色の「ひよこまんじゅう」の空き箱があったので、それを解体して、丸く切ってマジックで黒目を入れて目玉を二つ作って、黒いゴム紐にホッチキスで止めてみました。ゴム紐を輪っかにして、後頭部に装着するのです。

「そんなの付けて歩いていたら、カラスは来ないだろうけど、人も寄ってこないよ。おまわりさんが寄って来て職務質問されるかも。」と娘に笑われました。実際、これを付けてカラスのいる所を歩いてみると、カラスは攻撃して来なくなりました。困っている人はお試しあれ。ちなみに、まだ職務質問されたことはありません。

ノアの箱舟とカラス

ところで、カラスといってまず思い出すのは、ノアの箱舟です。そのころ、人間は神様を忘れて、悪いことばかりしていました。「主は、地上に人の悪が増大し、その心に凶ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になった。それで主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。そして主は言われた。『わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜や這うもの、空の鳥に至るまで。わたしは、これらを造ったことを悔やむ。』」（創世記6・5・7）とあります。

けれども、ノアは神の心にかなう人だったので、神様は彼とその家族に巨大な箱舟を造らせ、それに動物たちをも避難させました。それから大雨と地下水の噴出が四十日四十夜続き陸地は水で覆われてしまいました。箱舟は大海原を漂流し続けましたが、十か月経ったころ山々の頂が見えてきました。

ノアは水が地のおもてから引いたかどうかを観測するために、箱舟の窓を開きカラスを放ちました。するとカラスは船と空を行ったり来たりして戻ってきてしまいました。まだ水が引

いていなかったのです。

再びノアは水が地のおもてから引いたかどうかを見るために、窓を開けてハトを放ちました。ハトの方が遠くまで飛ぶ力が強いからでしょう。でもハトはノアのところに戻ってきました。七日たって、またノアはハトを放ちました。すると、ハトはオリーブの葉っぱをくわえて帰って来たのです。地のかわいたところには、すでにオリーブの木が生え出ているのです！さらに七日たってノアがハトを放つとそれはもう戻ってきました。ノアは水が引いたことを悟りました。

こんなわけで、ハトは神の怒りが去り、平和がやって来たことの象徴となり、以来、一万年、ハトは鳥の中で特権的な扱いを受けています。それに引き換え、カラスの方は、縁起でもない鳥ということになってしまったようです。



名誉挽回

でも、神様はカラスに名誉挽回のチャンスを与えてくださいました。紀元前九世紀、王国時代のイスラエルにエリヤという預言者がいました。「予言者」でなく「預言者」です。神のことばを預かって告げ知らせる務めを与えられた者という意味です。

エリヤの時代、イスラエル王国にはアハブという悪い王がいて、その嫁さんイゼベルは夫に輪をかけて悪くて恐ろしい王妃でした。時に神様はこの王国に懲らしめのために、干ばつをもたらしました。畑は涸れて地面はひび割れ、飢饉になりました。

そのときエリヤに次のような神様のことがありました。

「ここを去って東へ向かい、ヨルダン川の東にあるケリテ川のほとりに身を隠せ。あなたはその川の水を飲むことになる。わたしは鳥に、そこであなたを養うように命じた。」

そこでエリヤは行って、主のことばどおりにしました。彼はヨルダン川の東にあるケリテ川のほとりに行って住みました。すると何羽かの鳥が、朝、彼のところにパンと肉を、また夕方

にパンと肉を運んできました。彼はその川から水を飲んだのです（第二列王記二章）。

神様は、預言者エリヤを助けるためにカラスたちをお用いになりました。こういうところを見ると、カラスはやはり賢い鳥ですね。それにしても、エリヤはおなかをこわさなくて良かったですね。こんなふうにして、神様はカラスにも名誉挽回させてくださいました。



養い装ってくださいる神

私など、突っつかれるとカラス撃退！などと思ってしまうのですが、神様はカラスにさえも目をとめていてくださるのです。詩篇には、神様は「鳴くカラスの子に食物を与える方」とあります。思い出されるのは、主イエスのことばです。

「空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。それでも、あなたがたの天の父は養っていてくださいます。あなたがたはその鳥よりもずっと価値があるでは

ありませんか。あなたがたのうちだが、心配したからといって、少しでも自分のいのちを延ばすことができるでしょうか。

なぜ着る物のことで心配するのですか。野の花がどうして育つのか、よく考えなさい。働きもせず、紡ぎもしません。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも装っていませんでした。今日あつても明日は炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこのように装ってくださるのなら、あなたがたには、もっと良くしてくださいではないでしょうか。信仰の薄い人たちよ。」（マタイ 6・26・30）

私の父は、神戸のある会社で営業部の責任を取っている人でしたが、五十歳のときにイエス様を信じて母とともに洗礼を受けました。父が夜、帰宅してくるときには、以前は「鞭声肅々夜河をわたる・・・」などと詩を吟じていましたが、イエス様を信じてからは、右の主イエスのことばを大きな声で暗唱しながら帰って来るようになりました。父は言いました。「おとうちゃんは、このイエスエス様のことばを読んで、ほんまにその通りやなあと思たんや。おとうちゃんは毎日毎日、何を食べようか、何を飲もうか、何を

着ようか、どれだけ売れたか、どれだけ儲か

ったか、どれだけ損したか、とそんなことば

っかり心配して生活してきたなあと思たん

や。」「昭和一桁生まれの、戦争の生き残りの

父は戦後復興の時代に必死で働いてきた人

した。そして「自分がいないと会社はやって

いけない」というのが口癖でした。でも、父

が病気になる、さつさと会社は父を冷遇し

たこともありました。父は、むなしさを覚え

たようです。そういう父は、明日のことを思

い煩うことなく、きょうという日、神様に養

ってもらって自由に生きている空の鳥たち、

虚栄心など関係なく神様が装わせてくださる

ままに美しく咲いている草花を見なさいとい

う主イエスのことばが身に染み込みました。主

イエスは続けます。

「ですから、何を食べようか、何を飲もうか、何を

着ようかと言って、心配しなくてよいのです。これら

のものはすべて、真の神を信じない人々が切に求

めているものです。あなたがたにこれらのものす

べてが必要であることは、あなたがたの天の父が

知っておられます。」

確かに、天地万物の創造主であり支配者で

あるお方が、自分に目をとめていてくださる

ということを知らなければ、なんでもかんでも

自分でやらねばならないのですから、あくせく

と心配事だらけなのは当たり前でしょう。

でも、実は、そういう心配だらけの人生を送

る必要はないのです。万物の創造主があなたの

ことを心配してくださるからです。

栄光挽回

でも、あなたは「神があなたのことを心配し

てくださっている」と言われてもピンと来ない

かもしれませんね。なぜでしょう？聖書に「すべ

ての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができ

ない」とあります。聖書がここでいう罪とは「ま

とはずれ」のことです。つまり、本来、神の栄

光を映す鏡として造られた人間は、神を愛し、

隣人を愛して生きるという目的（まこと）つまり目

的が与えられていますが、その目的を外れてい

ること、それが罪なのです。神のことになんか

無関心で、いろんな欲にとらわれて思い煩って

いるのが、まとはずれなのです。

神を愛し、隣人を愛するという目的をはずれて

いると、「神からの栄光を受けることができな

い」というのは、鏡のように愛と正義の神の栄

光を反映して生きることができないで、死後は

闇だということです。

でも、神様は目的をはずれて悩み苦しんでい

る私たちのことを、なんとか助けてやりたい

と思われました。それで、ひとり子イエスさ

まを救い主として、私たちの住むこの世界に

人間として送ってくださいました。イエス様

は、その恵みと真実に満ちたご生涯をもって

まことの神の御姿を示し、最後は、十字架の

上で「父よ。彼らを赦してください。彼らは何をして

いるのか、自分でわからないのです。」と祈って

くださいました。そうして、わたしたちの罪

を背負って死んでくださり、三日目によみが

えられたのです。

このイエス様を信じるならば、神との交流

が回復し、鏡のように神の栄光を映しながら

生きる人生が始まります。明日のことは明日

に心配させて、今日という日を小鳥のように、

野のゆりのように生きる人生です。そして、

世を去れば大好きな神様のいらっしやる天国

なのです。何の心配もありません。

